

家族関係と子どもの性格形成（第3報）

- 接触対象と接触希望の関係について -

聖霊女短大 ○佐々木 久長 秋田大（院） 織田 栄子

【目的】 第1・2報に続き今回は、1)接触対象と希望対象との関係について、2)欠損と喪失という二つの指標の関係について、場面別に、また発達の関係について分析することを目的とする。そして〔触れ合う機会がない→(疎外感)→触れ合いたいという気持ちの喪失・・・家族の絆の希薄化〕というモデルの提起を試みる。

【方法】 被験者は秋田県の町立小学校（1年～6年、計246名）及び神奈川県内の町立小学校（2年～6年、計161名）の児童である。分析の対象とした調査の内容は、1)家族関係の接触度に関する項目、2)家族に対する接触希望に関する項目（それぞれ対応する7場面）。

【結果】 接触対象と希望対象のクロスの結果、基本的には同じ対象が選択されていたが「ほめる」「相談」などの場面では「接触対象は母親」だが「希望対象は父親」というケースも多くみられた。また接触対象が欠損している子供が、同じ場面における接触希望対象として誰を選択しているかをクロス集計し〔欠損に占める喪失の割合〕でみた結果、喪失が最も多く（44.3%）、次いで母親（20.5%）、父親（14.8%）と続いていた。これを発達のみにみると3年生（50.6%）と6年生（61.1%）で喪失の占める割合が多くなっていた。また場面別の分析では、「慰めてほしい」「相談にのってほしい」において欠損及び喪失が多く、これらの場面が子供にとって重要な場面であることが示唆された。また発達の関係には、接触希望喪失は6年生で最も多く（接触場面欠損に占める割合61.1%、人数に占める割合17.6%）になっているが、3年生頃から（頃に）増える傾向もみられた。